

ブライアン・D・パーマがあなたに贈るかつてないサスペンス・アクション。



殺しのドレス

マイケル・ケイン アンジー・ティンソン ナンシー・アレン 製作ジョージ・リットー 監督・脚本ブライアン・ティ・ハーマ 撮影ラルフ・ホード 音楽ヒン・トナジオ

DRESSED TO KILL  日本ヘラルド映画〈カラー作品〉

殺しのドレス

〈カラー作品〉アメリカ映画

DRESSED TO KILL

製作ジョージ・リットー
監督ブライアン・ディ・パーマ
脚本ブライアン・ディ・パーマ
撮影ラルフ・ボード
音楽ピノ・ドナジオ

アンジー・ディッキンソン
マイケル・ケイン
ナンシー・アレン
キース・ゴードン
日本ヘラルド映画 

この映画をご覧になる方は
ストーリーを知りたがらないで下さい。

ニューヨークのある秋の日の午後。マンハッタンのとあるアパートのエレベーターで、血まみれになったブロンドの女性の死体が発見された。殺されたのはミセス・ミラー。実は彼女は行きずりの情事のあと、相手のアパートを去るところだったのである。ミラー夫人にとってそれは初めての浮気だった——。

さて犯人は、その動機は？

80年の7月に封切られると、たちまちスマッシュヒットを記録し、官能と戦慄と目くるめく殺人のシーンが圧倒的にニューヨーカーの関心を独占してしまった。それがこの「殺しのドレスDressed to kill」である。あるものはヒッチコックの再来といい、彼へのオマージュといった。しかし、ある人々は、それが、いかにもヒッチコックふうでありながら、実は監督のブライアン・ディ・パーマその人のオリジナルなセンスにあふれた新しいミステリーであることに驚愕したのである。

80年代アメリカは映画のニュー・エンタテインメントの幕開けである。

性的にストレスあるミセスが、ズタズタにカミソリで切り刻まれる——それだけで充分すぎるほどにエロティックなイントロから、その犯人の正体を追いつめ、暴いていくプロセスは実際、息もつけないうほどスリリングで、エキサイティングである。それはミステリーという狭いワグをはるかに超えて、圧倒的に映画だけがもつ楽しさなのである。

内容が内容だけに、あまり説明することは許されないが、犯人の意外な正体、その、あつという動機、ディ・パーマ得意のラスト・ショック等々、どんな観客にも十分楽しんでもらえる一級の娯楽作品といえるだろう。

監督のブライアン・ディ・パーマは1940年、ニュージャージー州ニューアークの生まれ。製作は「愛のメモリー」で組んだジョージ・リットー、撮影は「ロッキー」「サタディナイト・フィーバー」のラルフ・ボード、音楽は「キャリー」のピノ・ドナジオ。

注目の出演はアンジー・ディッキンソン、マイケル・ケイン、パーマ夫人でもあるナンシー・アレン、キース・ゴードンなど。誰がどういう役を演じるのか、これもまた謎ということにしておこう。なお、シナリオはディ・パーマの書き下ろしである。

〈ブライアン・ディ・パーマ〉フィルモグラフィー⑦2悪魔のシスター ⑦3ファントム・オブ・バラダイス ⑦4愛のメモリー ⑦6キャリー ⑦8フェューリー



80年代最初の、最もグレートな作品。
ヒッチコックにだってこれほどの
エンタテインメントはなかった！

デビッド・デンビー
(ニューヨーク・マガジン)



4月下旬 G・Wロードショー
ヨールデンウィーク

日比谷
カラ座
(591)5355

歌舞伎町
新宿グランドオデオン
(202)0141

中央口
新宿 武蔵野館
(354)5670

国電・地下鉄開内駅北口
横浜スカラ座
045(641)8531